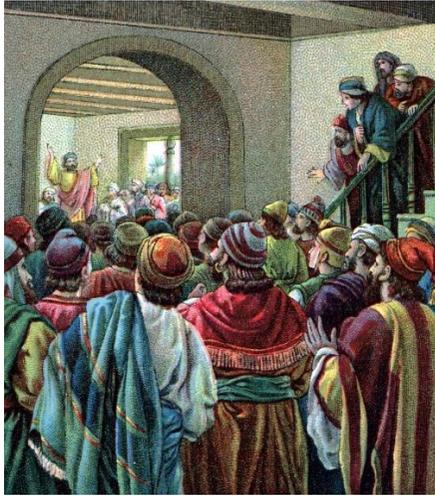


2023年7月23日 説教「異邦人のほうへ」

使徒の働き 13章 42～52節

パウロによるアンテオケの会堂での奨励で、救いのことばが伝えられました。福音が語られたのです。人々には新鮮な教えでした。



1. 神の言葉に引き寄せられ (42～44節)

① 次の安息日にも (42) 「ふたりが会堂を出るとき、人々は、次の安息日にも同じことを話してくれるように頼んだ。」

パウロとバルナバはビシデヤのアンテオケのユダヤ人会堂を出ようとする、会衆から、次の安息日(土曜日)にも同じことを話してもらいたいと頼まれました。同じことは、イエス・キリストが十字架にかかり、葬られ、よみがえられたこと、だからこそ救しを与えられるという福音です。

② 神の恵みにとどまるように (43) 「会堂の集会在終わってからも、多くのユダヤ人と神を敬う改宗者たちが、パウロとバルナバについて来たので、ふたりは彼らと話し合っ、いつまでも神の恵みにとどまっているように勧めた。」

会堂での集会后、多くのユダヤ人と改宗者たちが、パウロとバルナバについて来て、質問したりするのです。それに対して、ふたりが彼らに勧めたのは、神の恵みにとどまることでした。それは、まさにイエス・キリストの福音を信じ続けていくようにという勧めでした。

③ ほとんど町中の人 (44) 「次の安息日には、ほとんど町中の人、神のことばを聞きに集まって来た。」

パウロたちの宣教内容は人々にとっては強烈だったようです。次の安息日には、なんと町中のほとんどの人々が、そのメッセージを聞きに集まったのです。大伝道集会です。

2. 宣教は異邦人へと (45～48節)

① ねたみに燃え (45) 「しかし、この群衆を見たユダヤ人たちは、ねたみに燃え、パウロの話に反対して、口ぎたなく、ののしった。」

パウロとバルナバの語ることに人々が熱心であることを見て、ユダヤ人の指導者たちは妬みました。反発しました。人々がキリストを信じないように訴えたことでしょう。そのために、パウロとバルナバを罵ったのです。

② 拒んだユダヤ人 (46) 「そこでパウロとバルナバは、はっきりとこう宣言した。『神のことばは、まずあなたがたに語られなければならなかったのです。しかし、あなたがたはそれを拒んで、自分自身を永遠のいのちにふさわしくない者と決めたのです。見なさい。私たちは、これからは異邦人のほうへと向かいます。』」

パウロとバルナバの基本方針は、まずユダヤ人たちに福音宣教することでした。なぜなら、イエス・キリストはダビデの家系から生まれ、まずユダヤの人々に伝道したからです。しかし、ここでユダヤ人の指導者達はパウロたちが語った教えを認めませんでした。またキリスト信仰に基づいて得られる永遠の命を拒否したのです。そこで、パウロは異邦人伝道に向かうことを宣言しました。



③異邦人の光 (47-48) 「なぜなら、主は私たちに、こう命じておられるからです。『わたしはあなたを立てて、異邦人の光とした。あなたが地の果てまでも救いをもたらすためである』。異邦人たちは、それを聞いて喜び、主のみことばを賛美した。そして、永遠のいのちに定められていた人たちは、みな、信仰にはいった。」

イザヤ書49:6に「ただ、あなたがわたしのしもべとなって、ヤコブの諸部族を立たせ、…わたしはあなたを諸国の民の光とし、地の果てにまでわたしの救いをもたらす者とする。」とあります。その預言が成就しようとしているのです。イエスが異邦人たちの光となっていくという約束の言葉です。異邦人たちはそれを聞いて喜びました。そして主のみ言葉をほめたたえ、永遠の命に定められていた人たちは入信したのです。つまり、神の選びの中にあつた異邦人たちが信じるに至つたということです。

3. 弟子達は喜ばされ (49~52 節)

①地方全体に (49) 「こうして、主のみことばは、この地方全体に広まった。」

パウロたちの宣教を通して、主のみことばは、アンテオケ全体に広まっていたということです。覚えておきたいことは、「主のみことばの広がり」が述べられている点です。「使徒の働き」では聖霊の働きが強調されていますが、もう一方では御言葉の広がりという視点も大切にされているのです。

②扇動と迫害 (50) 「ところが、ユダヤ人たちは、神を敬う貴婦人たちや町の有力者たちを扇動して、パウロとバルナバを迫害させ、ふたりをその地方から追い出した。」

一方で、パウロ達に敵対するユダヤ人指導者達は、神を敬う異邦人である貴婦人たちや町の有力者達を陰で扇動しました。そして、パウロとバルナバを迫害させ、アンテオケから追放したのです。

③足のちりを (51~52) 「ふたりは、彼らに対して足のちりを払い落とし、イコニオムへ行った。弟子たちは喜びと聖霊に満たされていた。」

追放されたパウロとバルナバですが、ユダヤ人指導者たちに対し、足のちりを払い落したのです。彼らとの関係を断つという意味です。かつてイエスは弟子達に、その町の人々が受け入れない場合は、このようにせよと教えています(ルカ9:5)。そして、ピシデヤの東にあるルカオニヤのイコニオムへと行ったのです。ここで、弟子達とあるのは、パウロ達の伝道によって救われ、主の弟子となった者達のことです。彼らは主にある喜びと聖霊に満たされていました。

《結論》

今朝の聖書箇所において、パウロとバルナバは異邦人伝道(ユダヤ人ではない人々への伝道)に本腰を入れることとなります。それというのも、ピシデヤのアンテオケの会堂において多くの人々がキリストに引き寄せられるなかで、ユダヤ人指導者たちは、妬み、反発し、パウロとバルナバを罵倒しました。ユダヤ人へキリストを伝えることを怠らなかつた二人は、このことを通して、異邦人への伝道

に舵取りをするように促されます。パウロには救い主は異邦人の光であるという御言葉(イザヤ49:6)が強く響いていたからです。

私たちの歩みにおいても、方向転換を迫られたり、否応もなくそちらに向かわせられたりすることがあるでしょう。しかし、だからといって、それが必ず主の導きであるとは限りません。戻らなければならないこともありましょう。それでは、私たちはいかに主の導きを知るのでしょうか。私たちが主の導きかどうかを知るには、第一に自らの願ひがあります。主はそれを無視されるわけではありません。それを祈りのうちに申し上げていくことは許されています。第二に、目の前に出されたことが、自らの能力や賜物に揃っているかどうかということも大切です。第三にそれを知るためにも、近くにいて、霊的な眼、客観的な眼を持つ人からの意見や考えを知ることが必要です。第四には御言葉による確証です。パウロとバルナバにとっては、御言葉の確証がありました。さらに、パウロには、ダマスコ途上で主と出会った時から、異邦人伝道に進むことを、生涯の使命としていただいていた。使徒の働き9章15節に「主はこう言われた。『行きなさい。あの人はわたしの名を、異邦人、王たち、イスラエルの子孫の前に運ぶ、わたしの選びの器です。』」とあって、異邦人伝道に進むことは、主ご自身の御心であり、パウロの心の深い所に促しがあつたと思われまふ。そして第五に、主の導きであれば、主の平安が備えられるということです。

異邦人伝道については、第一回伝道旅行後にエルサレム会議が開かれて、異邦人の救いの問題について、議論が交わされました。そこで、ペテロは異邦人たちが救われて、聖霊が注がれたことを証人として伝え、それが主からきたものであることを論じました。またパウロたちも異邦人達に起きたことを伝えました。議員たちも、異邦人の救いを確認しました。そして、そのことは、取りも直さず、パウロが異邦人伝道に進んでいく大きな保証ともなつたのでした。

パウロとバルナバを通して、救い主が異邦人の光であることを示した時に、神に選ばれていた異邦人たちは信仰に入りました。主は確かに異邦人である人々にも聖霊を送ってくださったのです。この客観的事実も、ふたりを異邦人伝道に進ませる励みとなつたことでしょう。

私たちの歩みにおいても、その働きにおいて、祝福の結果を与えていただくときに、主の導きを確認させていただけます。しかしながら、なかなか結果が出ないことが、主の導きではないともいえません。主はそのことを通して、何事かを教えようとしているかもしれないからです。人間の思いをはるかに越えた主は、時を越えて大いなる御業をなして下さる恵み深い方だからです。

「わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。主の御告げ。それはわざわざではなくて、平安を与える計画であり、あなた方に将来と希望を与えるためのものだ。」(エレミヤ書29:11)。

主は私たちに、平安を与える計画を持ってくださっています。そして、私たちが前を向いて進むことができる将来と希望を約束してくださっています。進むべき道を求めている人も、この主に信頼し、平安、麗しい将来、希望を待ち望みつつ、歩いていこうではありませんか。